

手賀沼通信(第316号)

Eメール: nittay@jcom.home.ne.jp
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai

http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/
http://tegatu2.web.fc2.com

新田良昭

今月は弟のエッセイ 2 編です。

特別寄稿

「ジョニィへの伝言と阿久悠の言葉」(私の懐かしい歌 4) 新田自然

ジョニィが来たなら伝えてよ 二時間待ってた
と
わりと元気よく出て行ったよと
お酒のついでに話してよ
友だちなら そのところ うまく伝えて

ジョニィが来たなら伝えてよ わたしは大丈夫
もとの踊り子で また稼げるわ 根っから陽気に
出来るの
友だちなら そのところ うまく伝えて
今度のバスでゆく 西でも東でも 気がつけば
さびしげな町ね この町は

ジョニィが来たなら伝えてよ 二時間待ってた
と
サイは投げられた もう出かけるわ 私は私の
道を行く
友だちならそのところ うまく伝えて (一
部リフレイン省略)

この曲に出会った時、なんとも表現できない不思議な気分 - それは決して不愉快なものではなく、異質な気配のする空間にいるような気がしたのだ。日本の歌の、特に別れ話が持つ湿気が微塵もなく、登場人物も場所も日本ではないようではっきりしないけれど、空気は乾いている。それでいてセリフは、日本の日常的な、それも歌の文句にならないような言葉が使われている。新しいようで古い、不安定なようで落ち着いている。変なたとえだが、まるで宇宙船の中でお茶漬けを食っている、そんな気分を味わったのだ。

一方でオー・ヘンリーの短編小説ではないか、とも感じた。

私のイメージではこんなシーンが浮かぶ。

場所はアメリカの中西部の町、乾燥した夏の昼下り、バス停近くのスナック、カウンターに並んで(あるいはカウンター越しに)、旅姿の女性からのグチを聞かされている。女はジョニィとよく飲みに来ていた。年のころは 30 歳くらいか、ジョニィよりは年上だ。旅姿といっても白いジャンパーに紺のパンツ、白いスニーカーで、バッグとベースボールキャップ、ダークブルーのサングラスがいつもと違っているくらい。

「ジョニィはもう来ないわ、もし来たら伝えて、「2時間も待ってた」と。決めたわ、ひとりで行くと、サイは投げられたの、もう行くわ。今度のバスに乗って、どこへ行くか分からないけど、わりと元気よく出て行ったよって。それでどうするのかって? もともとダンサーだったのだから、何とかなるわ、心配しなくてもいいよって。あんたたち友達なんでしょ、お酒のついでに、そのところ、うまく伝えて」。と言って、女は足元にあるバッグを取り上げた。

この曲が、作詞 阿久悠、作曲 都倉俊一、歌ペドロ&カプリシャス(ボーカル 高橋真梨子)で発表されたのは昭和 48 年(1973 年)であった。曲は大ヒットし、レコード大賞作詞賞を受賞、NHK紅白歌合戦にも初出場した。高橋真梨子の、やかすれた低音も曲の雰囲気醸していた。

この歌物語の行く末は、その前の二人の事情も含めて、想像するしかないのである。それが余韻ともなって物語をふくらませる。日常の話し言葉で、歌詞としてはこんなふうには使われない言葉なんぞも出て来て、かえって新鮮な気分させられる。「無国籍ソング」と揶揄されたと彼は書くが、それが作詞大賞を採らせたのかもしれない。

・まずジョニィたる男は一体どんな男か、
・話を聞いているわたしはどんな男(あるいは女)か、その関係は？

・どうしてこんな話になったのか、
・女はどこへ行くのだろうか、
・二人の関係は、同棲していたのか、あるいは待ち合わせたのか、
・さびしげな町とはどこか、

(気がつけばさびしげな町であって、ニューヨーク五番街であっても、気がついてみればさびしげな街になりうる、人はいっぱいいるけど、どこかよそよそしくて…)

などいろいろ想像しながら楽しめるのだ。奥行き
の深い世界が広がるのだ。

同じ年の秋に「五番街のマリーへ」を、同じ作曲家都倉俊一とともに出した。同じトーンで描かれた作品は、完結した物語性をもっているが、しかし「ジョニィへの伝言」の続編として想像してみると、なかなか面白い推論が成り立つ。

「五番街へ行ったならば/マリーの家へ行き/どんなくらししているのか/見て来てほしい

五番街は古い町で/昔からの人が/きっと住んでいると思う/たずねてほしい

マリーという娘と/遠い昔にくらし/悲しい思いをさせた/それだけが気がかり

五番街でうわさをきいて/もしも嫁に行って/今がともしあわせなら/寄らずにほしい」

数年後、去っていったマリーをジョニィが訪ねて来て、わたしに依頼する「家へ立ち寄って、様子を見て来てほしい、五番街にいるはずだ、もし嫁に行ったら幸せに暮らしているならば、寄らずに戻って来てくれ、と。昔一緒に暮らしていて悲しい思いをさせたので…。しかし「嫁に行く」とはなんとも日本的な…。

(ウラで阿久悠がニヤリとしているような気がする、どうなりとご自由に解釈を、と)

阿久悠は昭和12年(1937年)淡路島に生まれ、私より一つ上、明治大学卒で、まさに同時代を生きて来た仲間世代だ。最も輝いていたのは1970年代であった。それはわが国が最も輝いていた時代と重なる。そしてやがて、時代はバブルといわれる

時代に突入してゆく。

「また逢う日まで(尾崎紀世彦)」「さらば友よ(森進一)」「宇宙戦艦ヤマト(ささきいさお)」「北の宿から(都はるみ)」「時の過ぎゆくままに(沢田研二)」「青春時代(森田公一)」「津軽海峡冬景色(石川さゆり)」「UFOなど一連の作品(ピンクレディ)」「せんせい(森昌子)」「ブルースカイブルー(西城秀樹)」「思秋期(岩崎宏美)」「舟唄(八代亜紀)」「もしもピアノが弾けたなら(西田敏行)」等他にもあるが、ヒット曲だけでもキリがない。

作品数は5000曲以上で、シングル売り上げでは秋元康に次いで歴代2位、一時代において秋元やシンガーソングライターなどが出て来るようになって彼は筆を擱いた。最後の印象に残った曲は「時代おくれ」(1986年)で、数年してバブルははじける。

「目立たぬように/はしゃがぬように/似合わぬことは無理をせず/人の心を見つめつづける/時代おくれの男になりたい」(河島英五)」と。2007年、70歳没。

都倉俊一は阿久悠とは10歳ばかり若い仲間でもあり、ピンクレディの一連のヒット作品は二人で作った。「阿久悠がイメージと題名を(たとえば『ペッパー警部』、イメージは『若いおまわりさん』『ピンクパンサー』などと)伝えてくる、都倉がそれらしく作曲して送ると、阿久が適当に言葉をはめていった」と彼が語っている。

このような曲作りは曲先という方法で、これに対し作詞を先行するやり方を詞先という。当時はまだ詞先が多かったようだ。レコード会社があり、プロデューサーがいて、専属歌手がいて、作詞家が詞を書いて作曲家がメロディを付けるのである。阿久悠はそのどちらもこなす歌作りの名人であった。「津軽海峡冬景色(作曲三木たかし、歌石川さゆり)」なども曲先だった。「曲が先にできていなかったら上野発の夜行列車がいきなり青森駅に着くなんて書けなかった」と述べている。

この「ジョニィへの伝言」も、曲は先にできていたそうであるが、二人の息がぴたっとしていたからであろう。「ぼくも都倉俊一も、自分たちの思っている歌のいちばん好きな形を自由に書いたもので、今もって好きな作品の上位に挙げている」「ぼくはこの歌を、一編の映画のように考えた」(阿久悠著「愛すべき名歌たち」)

友人が先日、高橋真梨子のコンサートに行ってきたそうである。彼女がリードボーカルとして加わった新ペドロ&カプリシャスの第1作がこの歌である。前述したように曲は大ヒットしNHK紅白歌合戦にも初出場した。1978年に独立し、翌年からコンサートツアーをスタートさせた。以来50年歌い続け、74歳、体調もあって、ついにラストコンサートになったようだ。彼女には「ごめんね」「桃色吐息」などヒット曲もあったが、「ジョニィへの伝言」「五番街のマリーへ」はプログラムの必須曲で、最も長く歌ったものだから情感がこもっていたそうである。聴きに行きたかった。正直うらやましいと思った。

特別寄稿

坊っちゃん列車と道後温泉

新田自然

終戦のころ小学1年だったので、昭和20年7月の松山空襲は記憶している。ほぼ全市内が焼け落ちたが、鉄道はそれほどでもなかったようで、空襲直後の松山市内を歩いた記憶がある。街中が水浸しで、行く先を書いた紙や板が、あちこちに貼られていた。松山に行ったのは、たぶん親戚の無事を確認に行ったのだろう、ばあさんに連れられて行ったことは間違いない。しかしそれにしても伊予鉄道の回復は早かった。松山へ行くには、国鉄があったが、ばあさんは伊予鉄にしか乗らなかった。

その頃の伊予鉄列車が、漱石の「坊っちゃん」に書かれた「マッチ箱のような汽車だった」のである。マッチ箱とは言い得て妙で、客車の長さが7・8メートルほどで、それを引く機関車もおもちゃのように小さく、狭軌、煙突は長く、汽笛は「ピーッ」と鳴った。1回の水補給では、松山までの僅か12キロを走れず、ほぼ中間にある駅で水の補給を行っていた。

中学校の先生話では、乗り遅れたら走って行って飛び乗ったそうだ。こんな話も聞いたことがある、松山までの中間に重信川という川があって、満員になると堤防を登り切れず、客を数名降ろして、押させたというのだ、まさか荷車ではあるまいし、聞いても信用できなかったが、明治のころの話では、「あり」かもしれない。それにしてものんびりした話で

ある。

伊予鉄では三津浜線が最初にでき、できたのが明治21年(1881年)である。漱石が松山に来たのは明治28年(1895年)、港がないので汽船から伝馬船に乗り換えて、海岸から駅までは歩いて行ったようである。

「停車場はすぐ知れた。切符も訳なく買って、乗りこんでみるとマッチ箱のような汽車で、ごろごろ五分ばかり動いたと思ったらもう降りなければならぬ、道理で切符が安いと思ったら3銭である」

漱石が小説「坊っちゃん」を発行したのは明治40(1906)年で、当時を思い出しながら書いたのだろう。だから時間等はいい加減なもので、いまでさえ5分では松山には着けない。

伊予鉄は、狭軌の軽便鉄道では日本初で、民営の鉄道では全国2位の早さであった。伊予鉄郡中線がわが町にきたのは明治33年であったが、それでも相当に早くついたものだ。そもそも国鉄が新橋をスタートしたのは明治14(1881)年で、松山まで延伸したのは昭和2年、わが町にたどり着いたのはさらにその3年後のことで、伊予鉄に比べるべくもない。だからJR松山駅は辺鄙な処に立てなければならなかったのだ。明治維新には乗り遅れたが、伊予の人はのんびりしていても、やることは速かったのだ。

私は高校に通うため、伊予鉄を利用した。戦後電化した当時の伊予鉄電車は、ものすごい混みようで、満員電車の中でカバンを手離しても落ちない程であった。電車は3両連接であったが、入り口は決まっていた、先輩の美しい女学生が乗る入り口に決めていたのだ。その先輩とは車内で接近することもなく、ついに一言も口をきかなかったが、名前だけはすぐにでも出て来る。

話を戻すが、すぐ下に妹が生まれたため、私は2歳から母方の祖父母に育てられた。戦地にいる叔父の無事を祈って、祖母は松山の北端、道後温泉近くの石手寺参りを欠かさなかった。石手寺への道は、空襲もここまでは来なかったので、舗装もされてない遍路道であった。そこへ行くには伊予鉄松山市駅からチンチン電車に乗り換えて行った。チンチン電車とは市電で、これも伊予鉄の路線のひとつであった。運転手が足踏みして鳴らす警報が「チンチン」

と鳴って楽しかった。開通したのは明治 28 年で、電化されたのは後のことだろう。

ばあさんは、終点まで行かず手前の道後公園駅で降りた。そこから 2 キロくらい歩いたところに石手寺という寺があるのだ。石手寺は四国八十八か所第五十一番札所で、八十八か所のうちでは有名な大寺で、門前に清流が流れ、お焼きが売られ、寺域も広く三重の塔が聳えるが、幼い子どもにとっては遠く、迷惑な寺参りであった。

帰りには必ず道後温泉に入った、私が入られたほしのは、いつも女湯で、年齢が上がるにしたがい、なんとなく恥ずかしくなった。透明で軟らかな湯質で、いつまでも温泉の匂いが残った。後年大学の友人や、高校の先輩と入ったが、石の湯床が絶えず流れてくる湯に温められ、空いていた時は寝転がって楽しんだ。

二階に百畳くらいの大広間があって、そこで浴衣に着替える、今はどうか知らないが、脱衣所なんてものはなかった。そこに上がるには追加料金が必要だが、高杯のお茶が供され、お金を出せば、坊っちゃん団子を食べることも可能だ。

松山の市電も楽しい、緑に覆われた松山城を一周しているのである。城南線と城北線があり、お城から南西部が早くから開けた商店街があり一番町、二番町、三番町、と並び、一帯は四国で一番の商店街である。城北線の北東部は学校街である、俳人山頭火はこの辺りに家を与えられ、死ぬまで住んだ、住居は保存され、覗けば「なんぞな？」と出て来そうな感じのする小さな家だ。漱石と子規が住んだ愚陀仏庵は城南線の通る南東部にあった。漱石が俳句を始め、小説家になったのは、松山で子規と住んだからで、そうでなかったら、新聞社の社員で終わったか、大学教授くらいにはなったかもしれない。

漱石も、松山のことはぼろくそに書いたが、温泉だけは褒めている。どうして伊予鉄のことを褒めなかったのか、そこに作為があるように感じる、漱石は松山がそんな先進的な町であることを書かず、ど田舎に見立てて、タヌキやうらなり、そこに都会くずれの赤シャツ、マドンナを登場させ、小説を盛り立てたかのように感じるのだ。

とにかく伊予鉄の歴史は伊予の数少ない誇りである。ばあさんの記憶と伊予鉄と松山城、そして道後温泉、これらは数少ない私の宝物である。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

松山市内を走る「坊っちゃん列車」

漱石の「坊っちゃん」に「マッチ箱のような列車だった」と書かれた列車が「坊っちゃん列車」として松山市内を走っています。



伊予鉄道開業から間もない明治 21 年から 67 年間、松山と周辺の町を結ぶ列車として活躍しました。

上の写真はオリジナルの列車を復元したもので、松山市内の路面電車のレールを観光のための「坊っちゃん列車」に姿を変えて走っています。

昔は石炭を焚いて煙を吐きながらでしたが、今はディーゼルエンジンに変わりました。煙突から出ているのは煙ではなく、煙に見立てた蒸気です。

観光用のため料金は、大人 1300 円、子供 650 円とやや高め、運行は、土、日、祝日です。

運行ルートは、松山市駅から道後温泉、古町駅から JR 松山駅経由で道後温泉の 2 系統です。

